

立柱建物跡の位置は、その北方約72mの位置に当り、一町の%の間隔を置いて南北の関係にあることが明らかとなった。

よって、前記、奈良時代の平城京に所在した諸寺、あるいは諸国国分寺の諸例からして、これが僧房あるいは食堂としての可能性が強いものと思われ。

山王廃寺は優秀な遺物の存在が知られている割に、遺構の存在については不明な点が多かった。事実、昭和51年度第3次調査において、「礎石群Bの建築遺構」が確認されるまで、塔跡が山王廃寺を立証する唯一の遺構であった。しかし、礎石群Bの建築遺構の確認に続いて、今回、掘立柱の建物跡が発見されたことによって、遺構についての資料が増加し、伽藍配置並びに寺域について、ようやく検討を開始し得る状況に到ってきた。即ち、伽藍についてみれば、塔跡をとる南北中心線と、掘立柱の建物跡の南北中心線とは、15m70cmの間隔があり一致しない。また、主要伽藍の一つと目される「礎石群Bの建物跡」の南北中心線は現時点では明らかでないが、塔跡中心線とは一致しないことは確かであり、むしろ、掘立柱の建物跡の中心線にのるかそれに近いものと考えられる。こうした場合、従来から有力視されてきた四天王寺式の伽藍配置説には問題があるとされよう。そして、金堂と中門を回廊で結び、その中軸線上に南門、北に講堂と僧房を配し、塔を軸線の東または西に配するという7世紀後半の中央寺院の典型的伽藍配置にそって、改めて検討の要があるといえよう。

さらに、寺域の規模・形状については、従来塔を中心に、東西南北方向へ各一町と推定してきたが、北ほぼ一町の位置に、僧房乃至食堂とみられるものが確認されたことによって、少なくとも北方地域については、これまでの寺域推定地域を北方へ更に拡張する必要がある、その検討がのぞまれる。

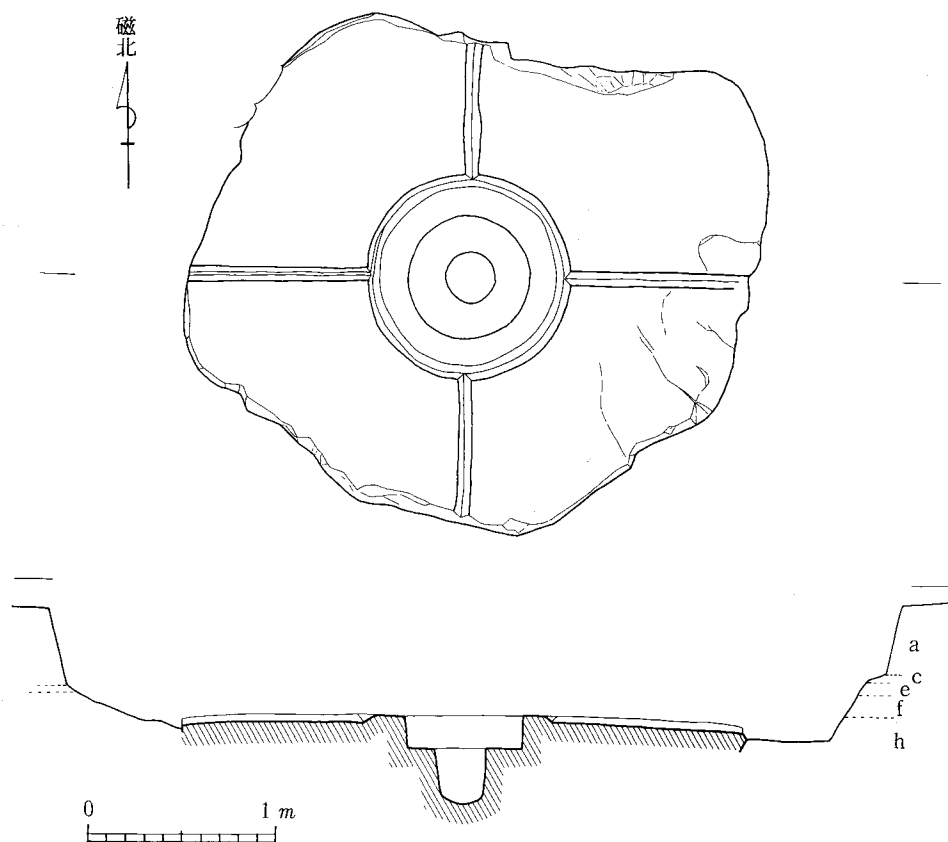
以上、本次調査によって確認された、掘立柱の建物跡の性格とそれが確認された意義について触れ、本稿の結びとしたい。

付 塔心礎について

山王廃寺跡は、大正時代の始めに偶然塔の心礎が発見され、その存在が明らかとなった。その後
(注1)
塔の心礎は大正10年8月に改めて発掘調査され、昭和3年には心礎を中心とした214.9㎡の範囲が国の史跡に指定された。そして昭和9年に心礎を保護するため上屋が建てられ今日に至っている。しかし、それから40年余りを経た現在、上屋の老朽化が著しく柱の根元が朽ち、さらに接する松の大木の幹に押されて全体的にゆがみ、倒壊する危険さえ生じてきた。そこで前橋市教育委員会では塔心礎を保護し活用するため、国庫補助を受け上屋の改築工事を実施した。以下、上屋を改築するに先駆けて昭和52年2月18・19日の両日、心礎の上面及び周囲の攪乱土を排除し、心礎の平面実測を行い、合せて周囲の地層断面の観察を行ったので、その観察結果を記しておくたい。

心礎は、表面を平らに整形した硬質の角閃石安山岩で、東西長300cm、南北長250cm、厚さ150
(注2)
cm余りの巨石を用いている。心礎表面の中央には二段に穿たれた舍利孔があり、その内孔の底は碗底状を呈している。舍利孔の周りは15cmほどの間隔をあけて断面V字型の環溝が囲んでいる。環溝の内縁から舍利孔にかけては、環溝の外縁が鋭く削り出されているのに比し、丸みを持たせ、柔ら

かい盛り上がりを見せている。さらに環溝の外側には、断面V字型の溝がほぼ東西南北方向に放射状に延びている。なお、この放射状溝の方位は、今回の調査においては南北溝 $N-3^{\circ}48'50''-E$ (磁北)^(注3)、東西溝 $E-2^{\circ}35'20''-S$ (磁北) の数値が得られた。以上の心礎表面の技法については、すでに尾崎喜左雄博士によって、宝塔山古墳石室の天井石や蛇穴山古墳の石室に認められる線や壁面の技法、さらには奈良薬師寺西塔の心礎の技法と同じものであることが指摘されている。^(注4)



挿図29 塔心礎実測図

(注5)

今回の調査で得られた各部の計測値は次表のとおりである。

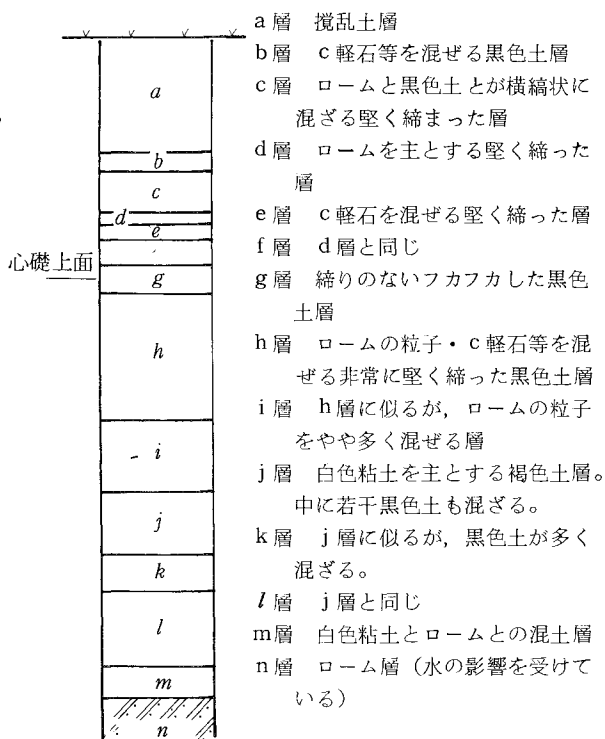
心 礎		舎 利 孔				環 溝				放 射 状 溝				
		外 孔		内 孔		外 縁 径		内 縁 径		東溝	西溝	南溝	北溝	深さ
東西長	南北長	外 径	深さ	内 径	深さ	外縁径	底径	内縁径	深さ	長	長	長	長	
3	2.5	0.65	0.18	0.27	0.30	1.08	1.02	0.94	0.03	0.92	0.97	0.75	0.72	0.04

表8 塔心礎各部計測値

(単位 メートル)

心礎の周辺は、現在その南側・東側を走る道路の面より60cmほど高くなっており、塔の基壇のあ
ることが推測されていたが、今回の実測調査における心礎南側の地層断面観察の結果、心礎の表面
より上方30cmまで版築の跡が残り、その上から地表にかけては攪乱土層 (a層) の堆積しているこ
とが明らかとなった。すなわち心礎は、その表面が基壇表面より地下 (現状で30cm下) に来るよう
に据えられている。版築はローンを主とする層、浮石等を混ぜる黒色土層、あるいはそれらの混土

層等を、薄い層で4cm、厚い層で23cmほどの厚さで12層（b層～m層）重ねて積んでおり、いずれも非常に堅く突き固めている。また、自然堆積土層（n層）は心礎表面より110cm下方になって始めて表われ、付近の状況からして、基壇を造るのに際して「掘込地業」の行われたことが推測される。心礎はすでに大正10年の調査においてその厚さが150cmほどあり、その周囲に玉石を根締めとして詰めていることが確認されている。^{（注6）}心礎表面より下110cmほどの位置に自然堆積土が来ることから、心礎は「掘込地業」の底面に直接据えられたか、あるいはその部分だけさらに掘り下げて据えられたかに見える。



挿図30 塔心礎南側地層柱状図

（注1） 群馬県史蹟名勝天然記念物調査会臨時委員福島武雄氏等により発掘調査された。

『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯』昭和3年

（注2） 深さについては大正10年8月の調査時の計測値による。

（注3） 放射状溝の方位については、昭和51年の計測時において、それぞれN—5°—E、E—5°—S、S—5°—W、W—4°—Nの数値が得られている。『山王廃寺跡第2次発掘調査概報』昭和51年。今回の計測値とは2°前後の開きが生じているが、この違いは計測地点の違いによっても生じる可能性がある。

（注4） 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』昭和41年。『前橋市史』第一巻 昭和46年

（注5） 心礎表面の各部の計測については、すでに大正10年の発掘調査時、群大史学研究室における実測調査等により何度となく行われているが、計測地点の多少のずれから、その数値の細部において若干の差が生じている。

（注6） 注1と同じ。